

---

# 平凡勇者の異世界冒険記

桃野アリス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

平凡勇者の異世界冒険記

### 【Nコード】

N3384W

### 【作者名】

桃野アリス

### 【あらすじ】

どこにでもいる平凡な男子高校生、伊藤 翔（俺）はいつも通り登校し、授業をサボって寝た。そして起きたら、そこは異世界、目の前には…超絶美少女！？??? 翔が奮闘するお話です。ご都合主義、チートな最強系、ハーレム要素が苦手な方はご注意ください。一話の長さを短くし、更新速度をあげております。内容加筆・修正にお気を付けください。

## 序章（前書き）

始めまして、桃野アリスです。  
ぜひ暇つぶしにでも読んでもらえればと思います。

9 / 9 修正しました。

## 序章

……どこだ、ここ。

気付いたら木の小屋のベッドで寝てました。

なんてバカな状況があるわけが……。

待て待て、落ち着け落ち着け。

そう、こんな時はまずは状況判断からだ。

えー、さっきも言った通り木の手作りっぽい小屋に、これまた手作りっぽいベット&その他の家具。

そして、俺が寝てるベットのわきには超絶美少女。

……小屋と家具には（とりあえず）目をつむろう。

しかし、何だこの子は。見たところ同い年か年上っぽいが、何といっても可愛い。そう、可愛いのだ。

このレベルの子は、クラス、学校どころか県でもそうは居ないんじゃないか？

黒髪黒眼のストレートヘアで、くうくう寝てる姿は、とてもいい絵になる。

眼福。

って、そんな場合じゃない。俺は何をしてるんだ。

とりあえずこの子を起こして、俺が何故ここに居るのか聞かなければいけない。

そう、分かってはいるんだが……。

起こせられん。

とりあえず、まずは自分で何故こんな状況になったか考えよう。

回想スタート。

いつも通り普通に投降した俺は、4時間目まではまじめに授業を受けたものの、給食を食べた後の5時間目・数学の聞いてもどうせ分からん教師の解釈を聞きながら、寝た。

回想終了。

とりあえず記憶に残る自分の行動はわかったが、やっぱり聞かないと分からないな。

しかし……、やっぱり起こせられん。

仕方ないだろ？目の前でこんな可愛い子が寝てるんだぞ？

どうやったって罪悪感が出てくるだろう。

まあ、実際の所もう少しこのままでいたいというのが9割なんだが。

さて、どうするかね…。

って、俺さつき「黒髪黒眼」っていつてなかったか？

寝てるんだから、もちろん目の色は分からないはずなのに……。

## 序章（後書き）

誤字脱字、その他注意点・アドバイスなど、ご意見よろしく願います。

## 第1章（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

9 / 9 修正しました。

## 第1章

それから数分後。

「ふぁ？ んゝ、あれ、起きたの？」  
可愛い。

「はい。僕の名前は伊藤翔です。できたら、どんな状況なのか教えていただきたいのですが」

「あつ、えつと、私はミーナ！ それから敬語はいいよ、堅苦しいの嫌いなよね」

それから、ミーナは俺が何故ここに居るかを話してくれたのだが……、それは『森で倒れてたから町まで引つ張ってきた』という、至極簡単なものだった。

理解はできても納得はできないが、信じる。今、俺にはこの子しか知り合いが居ないからな。

何故そう断言できるのかと言うと、ミーナが寝ている時に外を窓から見てみたのだが、長期休暇に入るたびに旅行好きを飛び越えてマニアと化している両親&姉に引つ張り回され、世界の国全部回ったんじゃない？というくらい俺が見ても、ここは完全に見覚えがない場所だったから、多分異世界ってやつだと思う。

ただ単に来てない国という可能性もあるものの、それにしたって授業中の教室でサボって寝てたら外国、しかも森に置いてけぼりはおかしすぎる。

にしても、なんでこんなに落ち着いてられるのかね。昔から総勢

8人の大家族が持つてくる問題に何故か俺一人で対処して身についたスキルか？

「それで、なんでカケルはあんな森で寝てたの？ 見たとこ、冒険者って感じじゃなさそうだし」

冒険者？

「なんだ、その冒険者って」

「え？ ……嘘、知らないの？ 辺境の村でも常識中の常識なのに」  
割とはつきり言っな、おい。

「冒険者ギルドってのがあって、誰でもそこで登録すれば冒険者になれるのよ。冒険者は、冒険者ギルドで依頼を受けるの。薬草採取とか簡単なやつから、魔物討伐とか難しいのまであるわ。もちろん依頼には適した報酬があるから、冒険者は多いの。まあ、報酬が大きい分危険も多いけどね」

なるほど、なるほど。魔物討伐はとりあえずスルーしとく。

「その冒険者って、資格とか必要なのか？」

「はあ？ さっき誰でもなれるって言ったばかりでしょ、ちゃんと聞いててよね」

カケル、バカ？っていう目で見られる。ああ、すいませんね。

「でさ、その服はこの国の服なの？」

どの国って、日本だけど。

「ニホン？ 何それ、聞いたことないわ」

あー、それなんだけどな。

それからかなりの時間を使って俺は異世界から来た事を伝えた。

「ふうん、そう」

信じたのか……？ それに、もうちょっと驚くかと思ってたんだが。

「そう？ まあ、私、5歳より前の記憶ないし。概ね翔と同じなのよ。たまたま養子になって助かったけど、お母さんとお父さんが居なければ路頭に迷ってたと思うわ」

あー、すまん、話したくなかったか？

「誰もそんなこと言っていないわ！ ったく、変な勘違いは止めてよね」

善処する。

「そうそう、カケルはこれからどうするのよ」

「とりあえず冒険者ギルドって所に言ってみようと思うんだが」

「じゃあ、私が案内してあげるわ。どうせ道とか知らないんでしょ？」

ああ、そうだな、そうしてもらえると助かる。

「じゃあ、めざせ冒険者ギルド！ おー！」

って、そこまでやるほどではないんじゃない？……。

## 第1章（後書き）

誤字脱字、その他注意点・アドバイスなど、ご意見よろしくお願  
いします。

## 第2章（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

9 / 9 修正しました。

## 第2章

この大陸には3大国とよばれる国が存在している。

最大の領土を誇り、ドワーフ、エルフなど、主に人族以外の人が集まっている『自然と動物』のナルニ公国。

全ての学院、研究院などが集まっている『知と権力』のガロサ王国。

そしてここ、冒険者ギルドの総本部を受け持ち、商人なども多い『力と名声』のユツイ連邦。

小さな村や町などは全てこの3大国の内どれかの領土であり、3大国に戦争などではなく、友好な関係である。…少なくとも、今のところは。

『自然と動物』とか言うのは、いわゆる二つ名だそうで。ナルニ公国は自然が多く、飛竜など動物が多いのでそうなったそうなの。

ちなみに、ガロサ王国は知識か権力があればなんとかなる、ユツイ連邦は力任せな人が多く、名声が全てを決めるかららしい。ユツイ連邦もある意味権力じゃないか?と思ったのは言わないでおいだ。

まあ、これは全てミーナが冒険者ギルドに行く間話してくれた事だ。

「大体こんな感じね」

「ふむ。それと、魔物は?」

「…本当に何も知らないわね」  
仕方ないだろ、こっちに来てまだ半日もたってないんだぞ。

ミーナによると。

魔物は3大国にとって共通の敵であり。  
ときどき村を襲うのでそのたびに押し返してるそうさ。

なるほど。やっぱり魔物は敵なのか。しかし、魔物には魔物なり  
の生活があると思うんだが……。

「……飛竜がいるって言ったでしょ？」

ああ、確かに言ってたな。

「ナルニには多いってだけで、少しだけならガロサとユツイにもい  
るの。飛竜はね、とっても賢くて、人の言うことを理解するらしい  
わ。私、見つけたら速攻捕まえて育ててやろうと思ってるの」

育ててやるって……、おいおい。出来るわけがないだろ。

「飛竜を育ててる人はいるわよ？」

マジか…。

そうこうしている内に目的の冒険者ギルドに着いた。

……何故だ、ものすごく視線を感じる。こういう物なのか？

「……冒険者登録お願いします」

『はい。そちらの方は？』

「登録するに決まってるじゃない！」

はぁ！？

「おいおい、何してんだ？」

「何って、私も登録するのよ。文句ある？そうだ、カケル、チーム組みましょ！」

はぁ！？

「同じ反応なんてつまらないわね……」

そういうことを言うな。俺も反省してるから……。

## 第2章（後書き）

誤字脱字、その他アドバイスなど、ご意見よろしくお願いします。

### 第3章（前書き）

更新遅くなって申し訳ありません。

これからは、もっと遅くなるかもしれません。テストが近いので…。

9 / 12 修正しました。

### 第3章

「ちょっと待て、チーム？ 組めるのか？」

「言ってなかった？ 組めるのよ」

「つか、冒険者になるのか、お前が？」

「何よ、悪い？」

「いや……戦えるのか？」

全くそつは見えないんだが。

「当たり前じゃない！ 強いんだから」

ならさつさとなつとけよ。それに何故俺とチームを……。

「じゃあ登録しとくから。先に帰ってもいいわよ。大丈夫、私に任せなさい！」

すごく不安になつたので一緒に行くことにした。

その後、ギルドの職員さんからいろいろ説明を受けたが、まあ知つとした方がいいのはSS、S、A、B、C、D、Eのランクがあり、まずはEからと言われた。まあ、他にも規則とか聞かされたんだが、そこは省略。暑苦しいおっさんの説明なんて、聞いてもいいもんじゃないだろ？

兎にも角にも、『ギルドカードが明日完成しますので、依頼も明日からお願いします』と言われ、とりあえずあの小屋に戻る事にした。

そつえば、さつきから気になっていたことがあつたな。

「ミーナ、俺とお前が小屋を出た時から妙な視線を受けているのは

何故だ？」

「あんたの服が変だからでしょ。私達の髪が黒なのもあるけど。あんた、もう少し周りを観察しなさいよね」

あー、そういや金髪だの茶髪だのばかりで、黒髪は俺たち以外に居なかったな。俺ももう少し周りの観察力や推理力とかいうのをつけた方がいいのかもしれない。どうやってつけるのかは別として。

「ん？ ちょっと待て、お前の髪は黒いだろ？」

「知らないわ、気付いたらこうだったから生まれつきじゃない？  
でさ」

「ん、なんだ？」

「カケルはなんで冒険者になるのよ。こつちの世界はあんたの世界より技術レベルは低いと思うし、発明家と研究者とかでもよかったんじゃない？」

俺としてはお前が冒険者になる理由の方が気になるぞ。

「私が聞いているの、答えなさい！」

うーむ。改めて聞かれると困るんだが。魔物を見てみたいとか、魔術はあるのかとか。まあ、1番の理由は生きていくためだな。帰る方法が分かってない今は、とにかく仕事を見つけて金を稼がないと。異世界の知識を持っても俺は頭がいい方じゃないから、発明家や研究者は柄じゃない。考えるより即行動のタイプだ。一応は剣道とか柔道とかも親の趣味で無理やり習わされてたしな。

「ふーん」

興味なさそうだな…。聞いたのはそつちだぞ？

「それと、俺からも質問だ。『こつちの世界はあんたの世界より技術レベルは低い』と言ったな？ 確かにその通りだが、何故それを知ってた？」

「え？ 私そんな事言った？」

質問を質問で返すなど言いたいが、辛抱だ、俺。

「言った。何故だ？」

「知らないわよ、そんなの」

そんなの言うな。俺が元の世界に戻るかもしれないんだぞ？

「……なんでよ」

「俺の世界の情報は限りなく無に近い。ちよつとの手掛かりからでも帰る方法が見つかるかもしれないからだ」

後は、ミーナの存在になぜか違和感があるからだな。異世界の人間だからとも思ったが、ギルドの職員や冒険者を見てもそれは感じない。しかも、この違和感は危機を告げている感じじゃない。デジヤ・ビュのような……懐かしい感じだ。

「へえ、あんたもそうだったんだ」

「は？ じゃあお前も？」

「お前っていうのやめなさい！ 私にはミーナって名前があるんだから」

「じゃあ、ミーナもあんたって言うのやめてくれないか」

「むう……わかったわよ」

よし、交渉成立。

閑話休題。

「で、お……ミーナもなんか感じてたのか？」

「ええ、カケルの懐かしい感じじゃないけど」

「じゃあなんだ。」

「……言っわけないでしょ、バーカ!」

「おいおい……」

「ほら、さっさと帰るわよ! いい、あんたには部屋を貸すけど、もしあたしの部屋に入ってきたら殺すから」

「物騒だな……」

「うるさい! ほら、行くわよ!」

「ちょ、待って!!」

### 第3章（後書き）

次回、ギルドで初めての依頼です。  
サブ…ヒーロー？ 登場です。

## 第4章（前書き）

最初に、登場する事になっていたサブヒーローが  
最後だけ登場となったことをお詫びします。すみませんでした。

ほんの少し、残酷描写が入っています。

## 第4章

翌日、俺達は言われた通りギルドカードと依頼の為、ギルドに訪れた。

そう。訪れた、の、だが。

「おいおい、お前みてーな坊主が冒険者なんか出来んのか？ ガキは家帰って母親にでも泣きついとけ」

「ボスう、こっちの嬢ちゃん可愛いですぜ？ よし坊主、有りつ丈の金とこの嬢ちゃん置いてけや」

……総勢5人のヤクザ（？）にギルド前で文字通りからまれていた。

いや、まさに王道的なチンピラだなあ、これぞ雑魚中の雑魚キアラだとか俺が思っていると。

「カケル……こいつら殺していいかしら」

「いや、さすがにそりや駄目だろ」

殺人犯になっちまうからな。まあ、半身不随ぐらいならいいが。

「半身不随って……どうやってその状態にするのよ。それに、半身不随って何気に酷いわね。せめて内臓破裂にしときなさい」

ちよつと待て、内臓破裂も酷いぞ。下手したら死ぬんじゃないか？ それに、元は言い出したのはそっちだろう。

「むう……まあそうなんだけどさ、でm」

「おい、俺達を無視すんなよ！」

「なんだあ？ 逃げる相談でもしてやがんのか？」

「逃げられるとは思わない方がいいぜ？」

「俺達やBランクチームの『ゼウス』だからな？ 甘く見るなよ」

「……そうだ、そうだ!」「」

何たる連携プレー!。拍手を送りたい。

「バカ言ってる場合じゃないでしょうが!」

「つかそろそろウザくなってきたから黙らせていいか?

「するならさっさとしなさいよ! ったく」

了解。

俺は瞬時に雑魚共の背後に回ると、常人には見えない速度で首筋に手刀を叩きこんだ。

……何か異様に行動早くないか? 異世界だからって事にしよう。

「へえ、けっこう行動早いじゃない。褒めてやってもいいわよ?」

「はいはい。……見たのか、今のが。まあいいが、

「ミーナ、さっきこいつが言ってた『ゼウス』って……」

「神話上の神様でしょ?」

やっぱりそうだな。異世界のくせに、何でこんな所は同じなんだか。にしても、こいつらが神ねえ。似合わないな。

「似合わないどころの話じゃないわ、神に対しての無礼よ、無礼」

「言われてみればその通りだな。ん? 神様信じてるのか?

「別に。ただ、誰でもこいつらに自分の名前を使われたくはないでしょ」

これまたその通りで。さあ、さっさとギルドカード貰いに行くぞ。

「ええ、早く行きましょ。全く、無駄に時間を使っちゃったわ」

それは俺も否定できん。肯定してもいい。

「あの極悪非道と言われるBチーム『ゼウス』をあつという間に……！」

「あの二人は神様、いや、勇者か……？」

一部始終を見ていた町民にとんでもない方向で勘違いをされている事を、この時の俺は気付いていなかった。

「ミーナ、良い依頼あつたか？」

予定通りギルドカードを受け取った俺達は、良い依頼（主に金銭面的な意味で）がないか探していたのだが。

「だめね、討伐依頼はどれもDランクからだわ」

「だよな、Eランクなんて「掃除の手伝い」「引越しの荷造り」

「店の荷物運び」とか、町の雑用しかないぞ。

個人的に冒険者が雑用って言うのは何か納得いかないんだが。

「ん、これならまだマシかしら」

何だ？

「薬草採取よ」

おお、雑用よりはましかもな。期間と場所は？

「期間は3日以内、場所は町の外の魔物も出ない、平和な山よ」

山？

「そう。町から片道30分で着く距離よ。この辺りじゃこの山しか生えてないのよね」

ふむふむ、なるほどなるほど。何の薬草だ？

「ハリヘネ草を20本、多く持ってきたらギルドで買取もしてるみたい」

よし、それにしよう。

「じゃあ、早く……忘れてた」

「ん？」

「武器よ、武器。買っておかないとだめじゃない」

武器、ねえ。必要か？

「当たり前でしょ」

そうかい。じゃあ、買いに行きますかね。

「そうね。カケル、何買うのよ」

あー、そうだな。ふむ……剣にしよう。

「そう。私の武器は家にあるから、一回帰るわよ」

了解。……でも俺、金無いからな？

「大丈夫よ、私が買うから」

おお、何から何までありがとな、ミーナ。

「……勘違いしないでよ、偶々お金が余ってて使い道がなかっただけで、別に貯めてたへそくり出したとか、大体の武器屋を予め回ってたとか、そんなことはないんだから！」

そこまで取り繕うと逆に怪しいってこと分かってないだろ……。

「ここよ」

「へえ……」

武器屋なんか初めて来た。いや、日本だったら戦争もないし当たり前なんだが。

「おう、いらっしやい！ お客さん、欲しいのは……」

ん？ 言葉が止まった？ って…。

「……タクヤ？」

武器屋のカウンターに茫然と立っていたのは

「……カケルが何故ここにいる……？」

幼稚園から高校までずっと同じクラスという腐れ縁、  
『高野拓也』だった。

#### 第4章（後書き）

今回は最後のみの登場でしたが、次は必ず登場しますのでご安心ください。

…初めての依頼だったのに、依頼の件も全く出て来ませんでしたね…。

重ね重ねお詫びいたします。

## 第5章（前書き）

勢いで連続投稿いたしました。

遅くなりましたが、お気に入り登録ありがとうございます！

初投稿となるこの作品ですが、これからも応援よろしく願います。

## 第5章

「……本当にカケルか？ 偽物じゃねーだろうな」

「……ああ。そっちこそ……ドッペルゲンガーだったとかいう間抜けなオチじゃないだろうな」

「本当に、本物だな？」

「くどいぞ。というか、何でお前がここに……ぐぼおっ!？」

「カケルウウウウウッ!」

ええい、暑苦しい！ ウザい！ 抱きついてくるな！ さっさと離れろおおっ！

数分後。

「すまん……、取り乱した」

全く……変わってねーな、お前は。そうそう、抱きついてくるの禁止な。

「だ、だがカケル！ 抱き合うという事は親密な関係を表すために必要なスキンシップでは……!？」

誤解を招くような事を言っな、気色悪い。

「つれねえなあ、冗談だぞ」

お前のは冗談に思えねえんだよ……。

「……カケル、誰こいつ」

悪い、無視してたな。

「あーすまんミーナ、こいつは」

「なっ！？ 俺という者を差し置いて、美少女に手を出すだとッ！？」

「ぶっ殺すぞデメエ」

「ハイ、スミマセンデシタ」

わかればいい。

「……まあいいわ、で誰よ」

あー、高野拓也、俺の腐れ縁で現クラスメイト。

「で、親密な関係なのね」

違う、間違いなく違うぞ！ ミーナ、勘違いするな！

「おお、よく分かってるじゃないの、ミーナちゃん。同士だな」

「お前も肯定するな！ それに何だ同士って！」

聞き逃せなさすぎる！

「え？ 高校版カケルファンクラブの事じゃ？」

「聞いたこともないぞそんな物！ 頼むから嘘と言ってくれ」

高校版と言うところにも激しくツッコみたい。

「知らなかったのか？ さすが先輩……」

「ちよつと待て、先輩って誰だ」

「教えることはできん。最低限の守秘義務だ」

「吐けこの野郎」

「落ち着きなさいよ、カケル。で、コーノだっけ？ 私も入っている？」

「ミーナ、冗談だよな？ そうだと言ってくれ」

本当だったら激しく恥ずかしい。悶え死ぬ事、間違いなした。

「おお、いいぞ。最後のナンバーは……確か649だったか」

「おおーい、ちょっと待てー？ 俺の高校は537人在籍だったよなー？」

何その半端ない人数。つーかあり得ないぞ。

「もし、百歩、いや一万歩譲ったとして、俺にファンクラブなる物があったとして、650人近くも入る人がいる訳ないだろう」

「これだから鈍感は……。いや、フラクラか？」

「どっちでも同じようなもんじゃない」

何故だ、とても不名誉な事を言われている気がする。

「あ、ちなみに200人弱は男だからな？」

ちよつと待てええええええ！

いや、これ全部冗談だよな？ 俺にファンクラブなんかないよな？

「いい加減認めるよ、カケル……」

「カケルのせいで疲れたわ……」

俺か。俺のせいなのか……？

「そつえば、武器どうするのよ……」  
おお、全く忘れていたな。

「もう、依頼は明日にして武器買ったら帰りましようよ」

「ん？ 何買うんだ、俺店員だから言ってくれ」

そうだな、とりあえず剣を買いたい。

「ああ、お前、剣道参段だもんな」

覚えてたのかよ……。

「剣が集められてるコーナーだ、ちなみにここにあるので全部だ、予備とかはないぞ」

ほう。じゃあ、一通り見てみますかね。

…出来れば刀のような物があるといいが、そううまくはいかないよなあ…。

これは細い、あれは短い、それは軽い…。いいのが見つからない。

「そういえば、一つとっておきがあるぞ」

どんなやつだ？

「とにかく重い。それ故に長く、また適度に太い代物だ」

なんだその説明は……。とりあえず見せてくれ。

「ああ」

「これはまた……」

「……でかいわね」

「そうだろう、この店で確実に一番でかい剣だ」

行動が制限されそうだな…、兎に角持ってみるか。

「おい、それは試した全ての客が持てなかった」

おお、結構軽い。

「 筈なんだがな」

「 ちょっと、あたしにも持たせなさい」

「 だから、カケルはともかく女の子が持てる物じゃ」

「 …… ちょっと重いわね、これで戦闘はきついわ」

「 嘘だろ？」

「 なんで持てるんだよ、お前ら……」

「 いや、俺に聞かれても。つか、これならお前も持てただろう。

「 それとこれとは別だ」

「 持てたんじゃねーか。」

「 コーノ、カケルはチートよチート、気にしない方がいいわ」  
俺がチートならお前もチートだろう。

「 む、失礼ね」

「 だって絶対間違ってないしな。」

「 そうだ、タクヤこれ買っぞ。ミーナ、金」

「 ちょっとは遠慮とかしなさいよね……」

「 ああうん、もういい、なんかどうでもよくなってきた……」  
大丈夫か？

「 その原因のカケルに言われたくねえ！」

「まいどあり、っと。そういえば、どこの宿に泊ってるんだ？」

ミーナの家だが。

「は？」

だから、ミーナの家だって。

「……お前ら、知り合ってからどのくらいだ？」

「今日で2日目になるけど、それが？」

「何……！？ 2日目で親公認の1つ屋根の下だとっ！ いったいどこまで……！？」

「「変な勘違いすんなあー！！」」

今日は依頼に行くはずだったのに、何でこんなことになってるんだ……？

## 第5章（後書き）

遠慮なく、誤字脱字、その他アドバイスなど、ご報告ください。

## 第6章（前書き）

やっとできました…。

## 第6章

武器屋に行きタクヤと再会した翌日、朝。

タクヤのともでもない間違いを直すのに、1時間はかかったと言っておこう。

その後、料理屋で名前は解るがどんなものか全く分からない「コパゲジェファ」というパスタっぽいものを食べ、家に帰って寝た。もちろん部屋は別だ。

で、その翌日、俺達は町から離れた草原に居た。此処に居るのも、昨日のタクヤの発言が原因だ。

そう、タクヤは、

「依頼って今日受けたんだよな？　って事は期限は明後日になる。どうせ薬草採取なんか一日もあれば終わるだろ？　俺も手伝うから明日は訓練しようぜ！　あ、カケルは買った剣だろ？　俺も自分用の剣持つてるから覚悟しとけよ？」

なんて事を言い出したのである。

「つたく……俺はさつさと山に行つて薬草を集めたいんだがな」  
主に金のために。

「そんなこと言っても来てるんだから、お人好しね」  
うるせ。

「あ、照れてる？　実を言うと、私も移動したいんだけどね」  
移動？　依頼じゃなく？

「あー、えっと、うん、まあいいじゃない」

……今ので気にならない人はいないと思うぞ。ミーナ、いったい

「おお、来たかカケル！ 信じていたぞ、心の友よ！」  
走ってきた勢いのまま抱きつくな、ウザい、暑苦しい！

「抱きつくの禁止って言つたはずだろ！？」

「了承した覚えは一度としてない」

今しろ、すぐしろ。

「……やっぱり親密な関k」

「ミーナ、絶対違うから！」

「おお照れてるのか？」

何故だ、同じ意味なのにミーナにあった可愛らしさがかけらも感じられない。

「いやあ、そんなに褒められても、何も出ないぞ？」

断じて褒めてない！

「やっぱり親密なk」

もうやめましようねミーナさん！？ ていうか、分かっててやってるよな？

「さて、どうかしら？」

なんだその笑顔ちよっタクヤ抱きつくなっわああああ……。

「ミーナ」

「何？」

「絶対に楽しんでるだろ、やめてくれ」

「嫌よ」

何故だ、何故……！

「それと、さっきの事だが」

「さて、始めるか、カケル」

「おい、言わせるよ、タクヤ」

「何がだ？ ほら、行くぞ」

引っ張るな、服が破ける！

「ミーナ、さっきの何なんだよ！」

「カケル、せいぜい頑張りなさい」

スルー！？ 質問に答えるツ！

「嫌。じゃあね、薬草集めてるから」

おいっ。俺の話を聞け！

何故だ、まだ運動してないのに疲れている気がする……。

「さあ、行くぞカケル」

「ああ」

「じゃあ、スタート！ 頑張りなさいよ」

って、ミーナ、何時戻ってきた！？

「よそ見してる場合か！」

切りかかってくる剣を受け止める。力を込めて押し返せ……ない？

「普通の重さじゃねーな、この剣……」

「俺の剣を受け止めて耐えるなんて初めてだな、燃えるぜ」

「くそ、タクヤの体重&剣の重さか、比率は8対2だな、デブだし」

一旦距離をとり、走り出す。

「俺はデブじゃねえ、お前こそ細すぎんだよ！」

最高の速度で背後から襲いかかるが、受け止められる。

「細くねえ、俺ぐらいがちょうどいいんだよ！」

足払いを飛んでかわし、お返しに腹に一撃を叩きこむ。

「それにお前はけっこう食べるくせに太らないとは何事だッ！ 太れ、太れ」

タクヤのダメージが少ない事を悟る。と、蹴りを繰り出してきた。

「俺より食べる奴が何言ってやがるッ！ 俺は太らない体質なんだよッ！」

バク転でかわし、フェイントを織り交ぜながら攻撃。

「太らない体質……！？ 女の敵、女の敵がここに居るぞ、ミーナちゃん！」

隙を見て蹴りを出す、よろけたものの転ばせる事までは出来なかった。

「あーはいはい、そうね」

「投げやりすぎる、此処は怒るところだろう！？」

「ミーナもお前がバカすぎるから呆れたんだよ！」

「何い！？」

「呆れてるのはカケルにもなんだけど……。よく喋りながらそこま  
で戦えるわね」

そのミーナの呟きが俺達の耳に届く事はなかった。

## 第6章（後書き）

依頼と鍛錬が混ざった形になっております。

極神さんのアドバイス通り、とりあえず、鍛錬をさせてみようと思っただけです。

ミーナは魔術師なので、相手はタクヤにしようと思ったんですよ。ですが、書いてみたら何故かギャグになっているような……！  
違う物を想像してた方は申し訳ありません。私の力ではこれが限界です。

後、極神さんへの返信に書き忘れていたのですが、ハーレムだからといって、

女性だけとは限りませんのであしからず。

誤字脱字ありましたらご報告お願いいたします。

## 第7章（前書き）

PV・ユニーク数がすごい事に……！  
感謝感激です。

## 第7章

数十分後。

「はー、はー」

疲れた……。うわっ、あくびで涙出てみた、眠い…。

「ぜえ、ぜえ」…

タクヤ…、蹴りはないだろう。剣だけかと思ってたからビビったぞ。

「慌てずバク転でかわして反撃してきたくせに何言ってやがる……」

「いや、じゃあ反撃しないで何をしろと言っんだ……」

「もう、話してたらさらに体力無くなるわよ？ ほら、薬草取ってきたからギルドに戻るわよ、立ちなさい」

早、何時の間に……。つかちよっと待ってくれ、動けねえ。それに眠い。

「右に同じく。今は無理だ」

「何言ってんのよ、ギルドでまた依頼を受けられるのよ？ 良い依頼が取られたらどうするの」

いや、それはそうだが……。頼む、もう少し休ませてくれ。

「……し、仕方ないわね。少しだけなんだから、たまたま食料が残ってた事に感謝しなさい！」

ああ、するよ、ミーナすまないな。

「うっ、も、もういいわよっ、さっさと休んでなさい」

食事が出来るまで眠らせてもらう方がいいか？

「だから早く寝なさいよッ！」

じゃあ、お言葉に甘えて。

「はうう……」

「上目づかい×涙目×情けない声の3連コンボか、さすがカケルだ、うん。ファンクラブ造ってるだけある」

一眠りして料理が出来たと、タクヤに叩き起こされた。

……起こされるのはミーナが良かった。

「何でだ！？ お前まさかミーナちゃんの事をツ！？」

「違うわ！ 大体、会って3日……？ ……そんなような……違うような……。」

「ん？ 昨日会って2日って言ってたんだから、今日で3日だろ」  
確かにそうなんだが……間違っている気がするんだよね……。

「まあなあ。俺も初めて会った気がしなかったし」

「お前もか？ ミーナも同じことを言っていたような……。」

「それはともかく、さっきのはどういう意味だ」  
ん？ 男ならむさ苦しい男より、可憐な美少女の方が良いに決まってるだろう。

「……れ、例外と言う物がある」

「ならそいつはゲイだな、間違いない。」

「お、男の方が安心するとか……」

「その時点でゲイじゃないか……？」

「女性恐怖症とか……」

「だからゲイだって。」

「ぐうつ」

タクヤ、撃沈。

「何やってんのよ……。ほら、けんちん汁。食べなさい」

おお、懐かしき母の味。……いや、母さん死んだわけでもないのに何言ってるんだ、俺。

それにしてもうまい。今日食べたのは聞いた事も無い異世界料理だったし。やっぱり慣れてる料理の方が良いな。

「そうだな、分かるぞその気持ち。師匠には悪いが材料から何から違う料理ばかりだったからなあ」

「ありがと。これは昔から得意で、母様にもよく褒められたのよへえ。……んん？」

なんだ、何か違和感があるような……。そうだ。

「ミーナ、何故この料理を知っている？」

「何言ってるのよ、そんなの……。え？」

「……確かに俺達の世界の日本料理なんて、知ってるはずないな」「あれ、何で？」

本来ならこの世界の住民であるはずのミーナが俺達の世界の、しかも日本料理なんて知っているわけがないのに、ミーナは知っていた。

どういうことだ……？

「おかしいな、どう考えても」

ああ。だが、答えが出ない分には仕方がないだろう。

「じゃあ、この件は保留ね」

仕方ないな。

俺、何か分かったら報告するから。2人もよろしく。

「「当然」」

小さい事なのかもしれない。

だけど、気になる。気になってしまう。

まるで喉の奥に何かがつまったような、分かるようで分からない、もどかしい感じ。

結果はつまらない事かも知れないが、調べてみる価値はある。

そういえば。

俺はミーナに初めて会った気がしない。

タクヤも同じ事を言っていた。

ミーナも、俺に会った事がある気がする、この前言っていた。

この2つは何か関係があるのか……？

## 第7章（後書き）

毎回短くてすみません。

最後、雰囲気がミステリーっぽくなっているのはご了承ください。  
別にそんな謎でもないのです。  
次回から予約掲載になります。

誤字脱字ありましたらご報告ください。

## 第8章（前書き）

予約投稿失敗しました。  
すみませんでした。

## 第8章

「で、けんちん汁の事はともかく」

「ん？　なんだ、ミーナちゃん」

どうかしたのか？

「単純に疑問なんだけど……、コーノはどうしてこの世界にいるの？　コーノも、カケルが何でこの世界に居るか知ってる？」

「「あ……」」

そうか、あまりに単純すぎて忘れていたな。

「「なんでお前はこの世界にいるんだ？」」

被った？　じゃあ、

「「お前から話せ」」

……いやいや、何で俺から話さなきゃならないんだよ。

「それはこっちの台詞だ、カケルから話してくれ」

「タクヤが先だろ」

「いや、カケルが……」

「タクヤが……」

「もう、面倒臭いわねー。カケルから話したらいいじゃない、何を言い合ってるのよ」

まあ、それでいいか。

「高校の授業サボって昼寝したら、ミーナに助けられてた」

「高校サボって家で昼寝したら、師匠が目の前に居た」

……。

「違いは授業か高校かで、つまりどっちもサボったってことね。五

十歩百歩って言葉が此処までピッタリくるなんて、始めてよ」  
反論できん……！

「そういえばタクヤ、師匠って誰だ？」

「武器屋の師匠」

師匠？

「コーノが店番してた所？」

「ああそつだ。とりあえず、まともな職が見つかるまでは、出世払いで置かせてもらってる」

ギルドで冒険者になればいいんじゃないのか？

「元手があるだろ。冒険者&ギルドカードの金、使う武器の金、その他もろもろ」

ああ、なるほど。

「武器持ってたじゃない。それに、置いてもらうならお金貸してもらえばよかったんじゃないの？」

「金を貸してもらったわりに、住み込みで働いてるんだよ。武器は金ためて、やっと買った。俺も冒険者になるつもりだからな。で、その金を今は貯めているんだ」

「じゃあ私がなんとかするわよ」

……何とかってどうするんだ？

「もちろん冒険者登録をさせるに決まってるじゃない」

「ミーナちゃん、そんなお世話になるわけにはいかない。金だつて貯めてるし」

「そのまま貯めときなさい。お金は有るに超した事はないわよ？」  
いやまあ、それは全く持ってその通りなんだが…。

「でも、ミーナちゃんのお金が……」

そうだ、ミーナ。お前の金を使う必要はないぞ？

「何時私が、自分の金を使うって言ったのよ」

「はあ？」

いや、だって、タクヤの冒険者登録に掛かる金をお前は払って  
言ってるんだろ？

「違うわよ。さっき言ったじゃない、冒険者登録を『させる』って」

「……おいおい、そりやどっという意味だ、ミーナちゃん」

「コネを使つてよ」

……満面の笑顔で言われても。

「うんうん、コネっていいわねえ」

ここはギルド前。薬草採取の依頼を達成し、タクヤの冒険者登録  
も済ませ、新たな薬草採取の依頼を受けて、出てきたのだ。薬草採  
取の依頼が多いと思わないでもない。

そして、今現在タクヤは項垂れている。やはり、自分の力で登録  
したかったのだろう。もう遅いが。

「俺が……、俺の苦労はどこに……！」

……ご愁傷様。でも、金は無くならなかったし、結果オーライだ  
ろう。

「そうじゃない、こういうのは気持ち的な問題で……！」

それだと俺はどうする事も出来ん、すまん。

「うわっ……。お前等かよ」

誰だこの男。ミーナ、知り合いか？

「この前絡んできたチンピラ共のリーダーじゃないの……。何で忘れてるのよ」

すまん。全く興味がない。

「俺に興味がないだとお！？」

ああ。そうだが？

「お前は上位チームのリーダーに敬意を払おうとは思わねーのか！」

思わん。尊敬とかは認めた相手にしか俺はしない。何であっさり負けた奴に敬意を払おうという思考になれるんだ？

「それだ！俺達がやられるなんて事はあり得ないんだよ！どうせお前、何かイカサマしたんだろ？」

だから。何でお前ごときにイカサマをする必要があるんだ？必要ねーだろ。

「そんなわけが」

ええい、煩い奴だな。眠ってる。

「ごふっ」

蹴りを脛に入れておく。これで煩くないだろう。

「カケル、いつまでそんな奴に手間取ってるのよ、早く行くわよ」  
了解。

さて、そろそろ街門だな。

「セキュリティ甘いよなあ、普通見ただけで通さないだろ」

同感だ、危機感つてもものがないのかね。

「油断してるんでしょ、ここ何百年か戦争なかったらしいし」

なるほど。

街門にたどりつくと、街門警備をやってるらしい騎士2人と、その2人に涙目で頭を下げてる16くらいの女の子の人がいた。

「お願いします、妹と弟を探してください！」

「しかし、我々はここを離れるわけには……」

……悪い予感が……。

## 第8章（後書き）

誤字脱字、その他アドバイスなど、お待ちしております。

## 第9章（前書き）

作者の名前変更しました。

「ぽてと 桃野アリス」です。

それにしても、学校って嫌ですね……。

## 第9章

「お願いします、妹と弟を探してください!」

「しかし、我々はここを離れるわけには……」

何か事件っぽいな、おい。

「そうね、行ってみるわ。……どうしたんですか? 何か事件でも

?」

お、ミーナが敬語を使っている。

「……殺すわよ?」

すみませんでした。

「そ、それが、タクヤさん?」

知り合いか、タクヤ。

「誰かと思えばルデイさんか。カケル、町で一番の宿屋『恵章亭』の娘さんのルデイさんだ。何でこんなところに」

「初めまして。それが、朝、妹と弟が遊びに行っただけ、帰ってこなくて……」

何?

「初めまして、カケルです。遊びに行ったというのは何時頃ですか?」

「えつと……午前8時頃だと思います」

5時か……。今が1時、もう6時間は経ってるな。

「初めは誰かの家に遊びに行っているものだと思っていたんですけど、何時もなら帰って来る11時くらいからおかしいと思って、騎

士団に搜索をお願いしたんです」

ふむ。

「けど、見つからなくて……ついさっき、町の外に2人が出ていったと聞いて……」

なるほど……。

「我々としても搜索したいのは山々なのですが、ここを離れる事は出来ないのです……」

この騎士さん、嘘言ってるいな。ものすごい悲しそうな顔してるし。

……というか、もう一人の騎士さんが羽交い絞めにしてるし。

「わかりました、私達は依頼で薬草を取りに行くのですが、探してみましよう」

ミーナに賛成。

「つーか、ここで反対したらただの鬼畜だろ……」

ごもつとも。

「ありがとうございます、あ、妹はグレーテルで、弟はヘンゼルと言います」

……まんま「ヘンゼルとグレーテル」だな。いや、こんな事考えてる場合じゃないんだが。

「グレーテルさんとヘンゼル君ですね。出来る限り探してみます」

「よろしくお願いします……」

「薬草は見つけたら採取、子供たちを優先、わかったわね？」  
もちろんだ。

「むしろ薬草なんか無視しちゃってもいいわ、2人を絶対に見付け

るの」  
「了解」

数十分後、かなり探したが、まだヘンゼルとグレーテルは見つからなかった。

「見つからないな……。遊びつて、どこまで行ったのかね、2人は遅い……。拓也の奴、いつ戻ってくるんだ

ん？　なんだ、今のは？  
気のせいかな？　幻聴って本当にあるんだな。

「うえっ、返してよ……。ヘンゼルのだもん……」  
ちよっと、やめなさい！　お兄ちゃんのなんだから

「ヘンゼル？　グレーテルか」  
また幻聴が聞こえた気がしたが、無視だ、無視。  
兎に角行ってみるか。何故かはわからないが、泣いている気がするし。

辿り着いた花畑に居たのは、座り込んだグレーテルと、少し離れたところでフラフラしている不審者だった。

「うえ、ひつく……帽子、返してよお……」

さつきから言ってるでしょ、さつさと返しなさい

「僕と一緒に来てくれれば、返してあげるよお」

ふん、誰が返すか。俺が使つてやる

何だ？

このさつきから頭の中で鳴り響くこの声は、何なんだ？

最初は幻聴かと思っていたが、此処まで鮮明に何度も聞こえてい  
ると、それでは説明できない。

瞬間、思い出したのは夕暮れ時、小学校の帰り道での一つの情景  
だった。

そう。入り組んでいて誰も好き好んで入ろうと思わないような裏  
道の先では、大柄な男に抵抗する女の子の姿があったんだ。

## 第9章（後書き）

最近スランプ気味です。

暇つぶしに書いている小説のほう書きやすくなってしまったんですよ……。

不甲斐無い作者ですみません。

投稿が遅れる事は無いので、優しい方はご安心？下さい。

## 第10章（前書き）

更新遅れました。

私に予約投稿は向いてないんでしょうか……。

今回は異世界ではなく前の世界での話になります。

## 第10章

その日、まだ小学6年生の俺は本来の通学路では無い裏道で、忘れ物をした拓也が戻ってくるのを待っていた。

「遅い……、拓也の奴、いつ戻ってくるんだ」

ここから小学校まで往復約10分だが、もう15分は経っているな。

忘れ物は俺が貸した本で、元々は姉に借りた物で、今日必ず返さなきゃいけない。

家に入った瞬間、姉に挨拶もなしに催促されるのは必須。なのに拓也が忘れたから、此処で待っている。

さっさと帰って返さないと、しびれを切らして迎えに来るかもな……。

全く興味ない本なのに、何でそこまできっちりしてんのかね。

ちなみに何故正規の道ではないかと言うと、そういう道には決まって大人が居るからだ。

ずっと塀に寄り掛かっている小学生    ランドセル付き    を教員が見逃す派がないからな。悪い事ではないんだが。

其の俣ボーっというのと、誰かの声が聞こえてきた。

「ちょっと、やめなさい！ お兄ちゃんのなんだから」

誰か知らんが、することもないし、行ってみるか。

「さつきから言ってるでしょ、さつさと返しなさい」

そこに居たのは、気の強そうな美少女に、如何にも柄の悪そうな大男。

「あの子は……叶井美衣奈か。もう1人は誰だ？」

叶井美衣奈。

俺が通っている董小学校のアイドル。

容姿端麗、文武両道、博学多才、全知全能の完璧超人。

しかして、その性格は元氣洩刺、天真爛漫、威風堂々、獅子奮迅、活潑潑地、大胆不敵、天空海闊、自由闊達、意志堅固などの四字熟語がぴったり当てはまる。

まあ、何を言いたいかと言うと、とんでもなく元気で、とんでもなく気が強く、とんでもなく意志が強いつて事だ。もちろん悪い子ではない。

野郎共が200人ほど告白して、その全てが玉砕したという。

兎に角、学校内所か、市内にも知らない人がいないんじゃないかというくらいの有名人。

そんなアイドルが、こんな裏道で何をやってるんだ？

「ふん、誰が返すか。俺が使ってる」

「はあ？ 女物のブローチよ、あんたなんか似合う訳ないじゃない」

「あー、ブローチ取られたのか。なるほど。」

「俺の妹にやるんだよ」

「あんたの妹？ 似合わないわね、間違いないわ」

「何でだよ」

「あんたの妹だからよ」

うわあ。兄が悪いからって、妹まで悪いとは限らんだろう。ブローチを取られている身としては、気持ちが解らんでもないが。

「なんだと？ あいつを悪く言うのは許さねえぞ！」  
「きゃっ」

おいおい。……ロリコンだな、間違いない。

「止める。突き飛ばすのはやり過ぎだ」

「誰だ、お前」

「人の名前を聞く時は自分からって習わなかったのか？ 一般常識だろう」

「はっ。俺は鬼島だぞ？」

「だからどうした。っーか聞いた事ねえ」

「何だと！ この鬼島の事を知らないのか！？」

「知らん」

「お前……ブツ殺す！」

「軽々しく殺すとか言っなよ、ったく……」

その20秒後、俺が勝った。

といつても、足払いをして転ばさせただけで、喧嘩とも言えないような物だったが。

「ちょっと……」

あー、えっと、叶井さん。ブローチ取り返したぞ。

「あ、ありがとう」

どういたしまして。

「私の事知ってるみたいだけど、もう一回自己紹介するわね。私は叶井美衣奈。あなたは？」  
「俺は伊藤翔、初めまして」

「おお、翔、此处に居たのか！　って、叶井さん？」  
「やっと来たか。」

「叶井さん、俺の親友の高野拓也」

「親友と言ってくれるか！　心の友よ！」

「ええい、抱きつくな、うっとおしい！」

「ふふ、仲が良いのね」

「何処が！」

「分かってくれるか！？」

「ええ」

「認めないでくれ、叶井さん！」

「何で？　何処から見ても仲が良いわよ。それから、私の事は美衣奈で良いわ」

「そうか？　じゃあ、美衣奈。」

「美衣奈ちゃん」

「何故ちゃん付け？」

「なんとなく？」

「なんじゃそりゃ。」

「いいわよ、私はそれで」

「そうか？　ならいいが。それから、俺の事も翔で良いぞ。」

「じゃあ、翔」

「ああ、それでいい。」

「そうそう、今度の日曜日、暇？」

俺は大丈夫だが。

「俺も」

「じゃあ、こんど北南公園に来てくれない？ 今日のお礼もしたいし、会わせたい子たちもいるの」

いいぞ。

「おお」

「絶対よ、約束だから」

分かってるって。

そうして、俺達は後日美衣奈に紹介された3人も含めて、6人でいつも一緒に居た。

そう　美衣奈が消えた、あの日までは。  
？

## 第10章（後書き）

ちなみに、これ以上前の世界での話は続きません。

もう少し後で、何話かまとめて「小学生編」で投稿します。

なので、この後はまた異世界の話になります。

閲覧ありがとうございます。

まだまだ未熟ですが、これからも応援してくださると嬉しいです。

誤字脱字、その他アドバイスなどご報告お願いします。

## 第11章（前書き）

すみません、遅くなりました。

難産です。また、少々残酷な表現があるかもしれませんが、それほどでもないと思うのですが……。

## 第11章

そうか 思い出した。

だが、かなり昔のことであつても、幼稚園ならともかく小学6年生、12歳だ。ミーナ達の事を覚えていないわけがない。

何故だ、何で俺はミーナ達の事を忘れた？

いや、俺だけじゃない。タクヤやミーナが覚えていたのなら、顔は覚えていなくとも、名前を聞いてすぐに気付くはずだ。

という事は、少なくとも俺達3人分の記憶があ頃の時だけ抜けているという事になる。

ミーナが消えたあの日に、偶然俺達3人の記憶が同時に消えたなんてある訳がない。

一体、これは誰の策略だ？

分からない 推理するにはピースが少なすぎる。

だが、これだけは分かる。

俺達3人の記憶が消えたのは決して偶然ではなく、またこの世界に揃って現れたのもたまたまではないかもしれない。

まさか、この時に俺が記憶を取り戻すのも誰かの予想範囲内か？

まだ、俺には何も分からない。

けれど、こんな馬鹿な計画を立てた野郎は必ず一発殴ってやる。

「やめろ、グレーテルに近づくなッ！ その帽子も返せッ！」

っと、回想してる場合じゃなかったな。しかし、あの子はヘンゼルか？ おお、ラッキー。探す手間が省けた。

「男の子かあ。僕は女の子にしか興味ないんだよねえ。早く何処か行ってくれるかなあ？」

こいつ、正真正銘の変態だな。

「そこで止まれ、動くな変態」

「ふえ……？」

「兄ちゃん、誰だ？」

「そんな事行ってる場合か、グレーテルを連れて早く逃げ　　っ」  
やばい、気が付かなかった。30人ほどに囲まれてやがる。

「お前達、何者だ？」

「盗賊だ」

自分でそれを言うかよ、くそっ。

さすがに、この人数相手じゃ2人を守りながらじゃ厳しい物があるな……！

そう思った瞬間、茂みから誰かが飛び出してきた。

「カケル！　俺が2人を守る、目を隠して見せないようにもする。だから、思いっきりやっちまえ！」

誰かと思ったらタクヤかよ、ビックリさせんな。だが、  
「わかった」

その提案には賛成だ。

「カケル、私がサポートをするわ」  
了解。

「はっ、この人数相手に勝てるんでも　　っ」

近寄って来た盗賊共を、剣を回転しながら振るう事で追い払う。

「この野郎！」

切りかかって来た盗賊の剣を受け止め、力任せに押し返す。  
「彼の者を焼き焦がせ　　ファイアーボール！」

「ぐあぁっ！」

背後からミーナの呪文と悲鳴が聞こえた。ミーナの魔法で焼かれたらしい。

「ぐおおっ」

盗賊の肩を切る。それでもう腕は使えない。一安心だ。

「カケル、左！」

おっと。振り向きざまに剣で盗賊の腹を切る。

「2人に近づくんじゃねえっ！」

「くそっ」

「タクヤ、大丈夫か!？」

「心配すんな、そっちを早く終わらせてくれ！」

「了解！」

「終わったか？」

「ああ、怪我してないか？」

それが問題だ。

「おお、俺の事を心配してくれるのか!？」

アホ、2人だよ。

「なんだ、大丈夫に決まってるだろ、俺が守ったんだから」

まあそうなんだが、一応確認だ。

「なあ、もういいのか？」

ん？ って、お前タオルで目隠しさせてたのかよ。

「それが一番確実だろう。ついでに手で耳も塞がせたぞ」

耳を塞がせたのはいいな。音も聞いてたら気持ち悪かっただろうし。

「そうだろう、そうだろう」

「あのねえ、目隠しを取ってあげなさいよ。何でほつといてるのよすまん。でも、この光景を見せるのは聊か酷な物がないか？」

「確かに、其処ら中に血が飛び散ったりしてるし」

「じゃあ移動させればいいでしょ。どうせ匂いは伝わってるでしょうけど。ほら、さっさと行くわよ」

盗賊共はどうするんだ。

「そんなの、騎士に連絡して運んでもらうに決まってるじゃない。こいつらは自分じゃ動けないだろうし」  
なるほど。

「思いつきり騎士をパシってる気がするんだが……」

気にしない方が良くぞ、タクヤ。

「ほら、早く2人を抱えなさいよ。私1人じゃ無理なんだから」  
はいはい。

ここは街門。2人の姉のルディさんが待っていた。

「お姉ちゃん、御免なさい！」

「薬草、お母さんの病気が治るかなって、うえっ、でも見つかななくて……」

「そう……。それなら、冒険者さんに頼んだのに。もうすぐ届くはずだったのよ？」

ん？ まさか……。

「もしかして、ハリヘネ草を頼んだのは、貴方ですか……？」

「え？ あっ、貴方達が引き受けてくれたんですね！ 有難うございます、勇者様」

はい？

## 第12章（前書き）

すみません、投稿遅れました。

## 第12章

「「勇者様あー!?」」

それはないぞ、ルディさん。

「あり得ないわよ、カケルが勇者なんて」

「冗談うまいなあ」

何か灼に触るが、本当だから仕方ない。

「え? でも、『ゼウス』を懲らしめて戴けたんでしょう?」

あれは偶然だ、うん。

「仕方なくよ」

そうそう。

「グレーテルとヘンゼルを見つけて来て下さいましたし」

いや、あの状況で無視するとか絶対無理だから助けただけなんだが。

「お兄ちゃん達、すごいんだよ!」

「変な奴を倒して、帽子も取り返してくれたんだ!」

「ほら、2人もこう言っていますし、薬草も取ってきて頂けたじゃないですか」

何か変な方向になってないか、おい。

「取りあえず、カケルは勇者じゃない…と思うぞ」

そこは断言してくれ、タクヤ。

「いや、有り得るかもしれないだろう」

何故。勇者って言ったら、こう街に攻めて来た魔物の大軍を追っ払うとか、そういうのじゃないか?

「あら、魔物の大軍と戦いたいのか? 物好きね。何だったら秘境の場所を教えてあげるわよ?」

遠慮する。何で自分から勇者になりに行かないといけないんだ。大体そんな所に行ったら死ぬだろ。

「大丈夫じゃない？ カケルとコーノだし」

「そうかもしれないが、カケル、俺としては止めた方が良さと思うぞ」  
あんな、俺は行くとは一言も言っていないからな？

「それにだな。俺はさっさと元の世界に戻りたいんだが」

「そう？ 私としては戻っても誰かが私の事覚えてるかどうかも分からないし、こっちの方が問題は有るけど、まだ過ごし易いから帰らなくてもいいんだけど」

確かにミーナが消えたのに俺達が覚えていなかった事を踏まえると、俺達も忘れられてるかも知れんが…… って、思い出したのか？

「そうだけど、言っていなかった？」

「そういえば俺も思い出してるが、言っていないのか？」

聞いてねーよ。つか、お前等から聞かないと俺が知ってるわけ無いだろうが。

「そうか、すまなかったな。まあ、思い出してるとはいってもカケルとはほぼ同じだろ、主観が違っただけ」

そうなんだがな。

「でも…私、消えた時の事覚えてないわよ？」

そうなのか？ 俺も人の事は言えないが。

「家で昼寝したのが最後だと思うわ」

確かあの日は日曜だったよな。俺達みたいにサボったって訳じゃないのか。

ふーむ。

「それは兎も角、ここから早く離れましょうよ」  
何でだ？

「ほら、ここに居たら注目浴びちゃうし。また勇者に祭り上げられるのは嫌でしょ？」

それはまあ、そうだが。

「じゃあ早く行きましょう、早く早く早く」

……何かあったのか？ あからさまに挙動不審なんだが。

「べ、別にっ？ そっそれより、行かなきゃ」

いやそれで不思議に思わない方がおかしいだろ。

「ああもう、そんな事は良いのっ！ あんた達だって、ストーカーとか護衛とか貴族とかそれ全部纏めた様な奴らの相手したくはないでしょ！？」

何かよく解らんが、とてつもなく面倒臭そうだという事は伝わった。

「じゃあとりあえず、何処か行こうぜ？ ミーナちゃんが何を嫌がってるのか分からないし聞く気も無いが、俺はもう疲れたぞ」

それには同感だ。さすがに色々 薬草採取とか行方不明とか山賊とか記憶とか ありすぎたからな。

「じゃあ、家であたしが覚えてる限りの料理作ってあげるから！

そうね、50品ぐらいで良い？」

多すぎだつて。幾ら俺とタクヤでもそれは無理なんじゃないか？

「いけるんじゃない？」

「右に同じく。カケル、食べるぞ！」

マジか……？

## 第12章（後書き）

評価して下さった方やお気に入り登録して下さった方には大変申し訳ないのですが、もしかしたら次の投稿は  
かなり遅れるかもしれません……。お詫び申し上げます。

関係ありませんが、「少年陰陽師」の

2次創作を書き始めましたので、よかつたらどうぞ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3384w/>

---

平凡勇者の異世界冒険記

2011年11月27日16時55分発行